

女のあしおと

宮尾登美子

女のあしおと

宮尾登美子

講談社

女のあしおと

昭和五十六年三月十六日 第一刷発行
昭和五十六年七月二日 第四刷発行

著者 宮尾登美子

発行者 三木 章

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二二／郵便番号一―二
電話東京〇三〇九四五―二二（大代表）／振替東京八三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

定価 一三〇〇円



落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

© Tomiko Miyao 1981, Printed in Japan

目次

I

浮き沈み五十年	11
御所人形	54
私と三月	56
得月楼とわたし	58
なつかしさを買う場所	61
土佐の海岸	65
四万十川の流れ	69
土電の思い出	73
豪快、土佐雑煮	76

Ⅱ

椿

黄塵

誕生日

口かず

こより

手仕事

花束

私のよい先達

主婦と小説

家事と小説

私と「著者を囲む会」

79

82

86

89

92

95

97

99

102

105

110

読者からの手紙

115

三味線

118

屋上庭園

124

水のはなし三題

128

いわぬはいうにいやまさる

135

幻の祥瑞

138

極月祇園行

142

机の虫のテレビ体験

147

銀座とわたし

153

小っちゃな盃

158

初カツオ

160

百年茶

162

孫のはなし

チビの言葉

紬のはなし

春待つ心のきもの

着物のしきたり

喪服

粋と野暮とは紙一重

見かけだおし

冬はきもの

便利なきもの

辛抱

素裕の季節

下着

164

167

170

175

181

186

188

192

195

198

201

203

206

Ⅲ

新内の一人弾き

心中天網島

山本周五郎の女性観

身ひとつ

一絃琴と水谷さん

和宮の念持仏

江戸ゆかた姿

ふるあめりか考

あとがき

装
幀
舟
橋
菊
男

女のあしおと

I

浮き沈み五十年

私が生まれたのは高知市緑町四丁目、大正十五年四月十三日である。この出生の日について、私は長いあいだ、母の口からほんとうは昭和二年三月十三日だと聞かされていたこともあって、いまだにどこやら信頼のおけぬ感じがする。

というのは、私は戸籍上では父岸田猛吾、母喜世の四女となっているが、ほんとうは、父は真実であつても喜世は実母ではなく、また私は四女ではなくて岸田家の長女なのである。信ずべき戸籍にこれだけ嘘が多いということは、誕生日もまたどんなにでも操作できるものとの疑いを抱かせる根拠ともなつて、私は一時、ほんとうの自分の年はいまよりも十歳も年上ではないかという怖れにとりつかれていたこともあつた。

母がなぜ戸籍と異なる誕生日を私に教えたかという点、実母は私を生んでしばらくののち、土佐の地を去つたらしく、後年、もしや私がこの事実を知つて母に詰め寄つたとき、誕生日を

ずらしておけばあくまで隠しとおおせると考えていたらしい。つまり、それだけ自分と私が生さぬ仲であるのを秘密にしておきたかったわけで、当時は母子手帳の制度もなかったところから、役所でも実子という届けはそのまま受けつけたものであろう。

この計算でゆけば、私は父四十五歳、母三十五歳のときの子になり、母はずい分とおそい出産であることから事実がバレはしないかと始終気をつかっていたようだった。

実母については、私は全く関心もなくまた何の知識も持たなかったが、最近になって知るところによると、生家は旅館、九人姉妹の長女に生まれ、小さいときから音曲に長けていたところから長じて義太夫語りとなり、芸名芳花、または利吉太夫として高知因会などで語っていたという。

父は利吉と懇ろになり、私が生まれたというわけだが、その前後の事情や、自分の誕生の状況について私は誰からも聞かされたことがない。たぶん緑町一帯、父による箱口令かんこうれいが布かれていたか、いやおそらく、回りが皆わきまえのあるひとたちばかりで、私の耳に入れないような気をつかっていたものであろう。

それでもたった一度だけ、誰の口からか私が「夕方に生まれた」ということを聞いた記憶があった、それは私の脳裏にしっかりと刻まれ、夕方実母の家で生まれた私は即刻誰かに抱かれて岸田家に移り、以後は喜世を真実の母として育ったと思ひ込んでしまっているところがあつた。喜世は戸籍を何よりの証拠として一生私をだまし続け、私もずっとだまされたふりをして

母をあの世に送ってしまった。だから私の家の仏壇には、いまなお猛吾と喜世の位牌しかないのである。

岸田猛吾というひとは、若いとき無頼の限りを尽くしたらしく、老年になって日記のうしろに書きつけた懷古談のなかで、「私、性粗暴ニシテ」と告白している。

私がものごとろついたときは緑町界限のいっぱしの顔役になっていて、町内会長、青年団長、消防団長などを相勤め、家の入り口には「芸妓娼妓紹介業」という大きな看板が懸っていた。多分さんさん道楽の挙句、翻然改悟し、人助けの道と思ひ込んでこの稼業に入ったものと思われるが、彼自身はその職業の目的を勝手に拡大解釈し、貧困者の子女が親孝行として身売りするのを助けるという本来の商い以外に、広く困窮者を救済するという意気に燃えていたらしいふしがある。

昭和初年は全国的に不況のどん底であり、また緑町の裏町は、高知市でも二大貧民街といわれた地区であって、猛吾の篤志行為の対象者にはこと欠かないありさまだったから、そのために家の経済は火の車であつたらしい。

さして広くもない家のなかには、年中あやしげな寄食人がごろごろし、飯どきにはたくさんの人がやって来るだけでなく、いつも裏長屋の連中に衣服を配ってやっていたものだった。また孤児となった女の子を拾ってきては片っぱしから入籍して自分の子としたため、私が戸籍上四女になっているのもここに原因がある。このうち、家の手伝いや私の子守りなどをしていた

菊と絹という二人については私に記憶があるが、あとの一人については全く預かり知らぬところだから、或いは私が生まれる以前だったかも知れない。

母の喜世は、父と一緒にあったとき十四歳だったと聞いており、まもなく男の子二人を年子で生み、私が生まれた大正十五年の時点で長男光太郎は二十歳、離室で結核のため病臥しており、次男英太郎は中学中退後家業を手伝っていたらしい。こういう状況のなか、臍の緒切ったばかりで連れて来られた赤ん坊に対し、周囲の反応は果たしてどうだったろうか。小説「權」ではその状況を描いてみたのだったが、母は案外、この煩雜で毎日多忙なだけの家事から解放され、私の育児に専念出来ることを喜んでいたのではなかっただろうか。

いま思い出しても盲愛、溺愛という言葉がぴったりとかわいがりかたで、そういう母に対し、父は快からず思っていたらしく、このあたりの感触は何となく思い出せば判る気がする。それというのも乳母と牛乳で育てられた私は、病気の問屋といわれるくらいよくわづらい、その看病は母が専門だったから、私が母以外の人間にはなつかなかったというせいもある。

私は多勢の大人のなかで、一見ちやはやされながらもその実、子供ごろに孤独感に似たものを感じながら母にくっついて育ち、昭和七年四月田淵町の高知市立第一幼稚園に入園した。

そのころ、下町あたりでまだ幼稚園に通わせる家は極く少なかったが、私の上に多大の望みをかけていた母は、少しでも良い環境へ私を置きたかったのではなからうか。無学な母が、私を幼稚園に入れるという才覚が自分一人で働いたとは思えないが、この前後、家に出入りする居